
モンスターハンター

～ 龍の住む世界 ～

DarkBloodyShadow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター

～ 龍の住む世界 ～

【Nコード】

N0299L

【作者名】

Dark Bloody Shadow

【あらすじ】

大地がいくつも広がり、そこには人間が住んでいた。数はさほど多いわけではないが、人間は知恵と経験から、充実した生活を送ってきた。

又、そこにはモンスターと呼ばれる様々な能力をもった生物がいた。その中には、草食モンスターから肉食モンスター、そのモンスターの群れの頂点にたつモンスターから、態系の頂点と言える龍が住ん

でいた。

そのようなモンスターと戦いをしているのがハンター。ハンターは長い年月をかけ、武器や防具を生み出し、命を懸け、モンスターを狩り、今の時代では、その体の何十倍もの巨体を持つ龍をも狩っていた。

激しい戦いがおきている世界で、太刀を振るう少年が1人。

まだ、駆け出しで小型のモンスターで精一杯な彼。

そんな彼が引き起こす、狩猟人生とは一体！？

その腕は！？

彼の仲間は！？

彼は伝説の龍を狩るほど、強くなれるのか！？

主人公

「あー。だりいー。」

その下僕

「その下僕って、ちょｗｗｗｗｗｗ」

主人公の彼女？

「主人公の彼女だなんて／＼クネクネ」

このサイトでは、初めて……ですが、他のサイトで一度、小説を書いたことがあります。

但し、作者は全く国語の成績がよくありません。ダメ文です。ダメ小説です。自己満足です。

更新速度は遅いかもです。

面白いと思ったならば、レビューなり、感想なり、メッセージなり送ってください。

1 つにつき、作者のやる気が90%上がります

†プロローグ（前書き）

最初は小説の前書きと同じ感じですがご了承ください。

＋プロローグ

最初は小説の同じ感じですが、ご了承ください。

この世界に住まうモンスター。

独自の進化でこの世界に対応し、今も進化を続けている。

敵である肉食モンスターから逃げるために。

あるいは、餌となる草食モンスターを捕まえるために。

様々な能力を得、縄張りを作り、群れとなり、繁殖してゆく。

この世界に住まう人間

モンスターという脅威に怯え、小さな森で小さな集落で暮らしてきた時代は終えた。

弱い草食モンスターの骨から武器を作り、その武器で弱い肉食モンスターを狩り、更にその爪や牙で武器を作る。

その繰り返しから、生まれた“ハンター”

趣味、正義、復讐、宿命。

理由は様々だが、命を懸け、モンスターを狩り、生活している。

ハンターが出来、そのハンターをまとめるギルドが結社。

人間は村から出て行き、新境地で新たな村を作る。

そして、村が街に、街が都市に。

人間も進化し続けている。

ここは都市。

どこを見渡しても、たいていの村にある、藁で出来た家は無い。木で出来た家も少ない。その変わりにレンガ造りの家が多く目立つ。更に、武器や防具を作る加工屋や工房、加治屋が多く建ち並んでいる。

る。

様々な種類の商人が行き交い、都市の中心部では、主婦（主夫？）が今日採れたばかりの野菜や草食モンスターの肉を買っている。店が建ち並ぶ商店街では、『はい！！！！奥さん方！！今、入ったアプトノスの肉だよ！！沢山あるからオマケしてやらあ！！5つセットで30Zでどうだい！！？』なんか聞こえると、簡単な戦争なんかもいくつか勃発している。

モンスターからの急襲を受けても、村や街にいるよりは遥かに安全な場所にいる彼ら。

ハンターを束ねる、“ギルド”がこの都市“セレスティア”に発足しているからである。

そのお陰で、このセレスティアに滞在する熟練ハンターも多く、人々は安全のためにここに移り住み、ハンターもここに集まってくる。そうして、自然に大きくなっていったのである。

そもそもギルドとは、

様々な狩猟場を設立（区間を設定）し、そこでの異変の有無、新たな大型モンスターの定住etc・・・などを監視している。

そのモンスターが近辺の村に危害を及ぼしたり、その狩猟場に生態系のバランスを崩す問題がある場合には、クエストとして、街の酒場（混乱を避けるために一カ所しかない）に張り出す。又、他の村や商人、王など、様々な人から、モンスターの討伐依頼がくることもある。

それをハンターが見つければ、契約し、狩りに行くのだ。

又、モンスターのランクによって、一般のハンターにはかなり危険

な場合には、ギルドが集めた、ギルドのための精悦部隊“ギルドナイト”に依頼をし、直接ギルドがモンスターを狩る時もある。その他、ハンターには、生態系のバランスを崩さないように、小型のモンスターや、飛竜の卵の乱獲を自重しなければならないのだが、その規則を守らないハンターを暗殺する部隊もある。と言われている。

そして今、その都市に滞在している、この物語の主人公“龍”。

龍は、この大陸ではなく、もっと東にある大陸出身なので、他の人より違う“漢字”という文字を使っている。

こんなだから、酒場でクエストを契約する時には、契約書に名前を書くのだが、“龍”なんて文字を書くと、ギルド嬢　主に酒場でクエストの管理を行う　を始め、そこにいるハンター全員が、『なんだこの文字は？』『難しい字だなあ・・・』『魔女みてえな字だなっ！！ハッハッ！！』『リユウって読むのか？へー』なんて、はやし立てられるに違いない。最も本人は、この漢字を誇りに思っているので気にしないが。

違いない、と言ったのは、まだ龍がセレスティアでクエストを契約したことがないからである。

龍は、まだ駆け出し。

ランポス　鳥竜種という種族に分類される小型の肉食モンスター。爪と牙が発達し、数匹の群れでハンターに襲いかかる。　は狩れるもの、大型モンスターはおるか、中型モンスターさえまだ狩ったことはない。

ではなぜセレスティアにいるのか？

それは、狩りの帰りだからである。

勿論、村と狩猟場は直線距離で、真っ直ぐ行けば長くても2日程度で着き、その間にはセレスティアはない。

が、龍がさつきまでいた狩猟場、“森丘” 一般敵な狩猟場。特殊なモンスターもあり出現せず、素材や小型がたくさんいる。

からここ、セレスティアは意外と近かったからである。

龍が腰を据えている村、“ラングノーズ村” で買うよりも、セレスティアで買い物する方が、品揃えも値段も充実しているのだ。

今は欲しいものを買うだけ買い、大きな袋 ポーチに入りきらなかったので、道具屋の店長がくれた とポーチを床に置き、その隣には龍の愛刀“鉄刀” 鉾石を使い作った太刀。 や防具“バトルシリーズ” 初心者向けの防具 も置いてある。

（説明ありすぎて、読みにくくてすいません。）

そして当の本人、龍は、ベッドの上で寝ている。
買い物に熱中しすぎて、夜になってしまったのだ。

今日の狩猟風景はまた次回。

† 第1話 龍の朝（前書き）

前回、狩猟はまた今度といいましたが、今回は書けませんでした。
すいませんm（――）m

あと、新しい登場人物がでます

十 第1話 龍の朝

ことの起こりは、4日前。

龍は、その日も単独で狩りにでていた。

場所は密林。

ラングノーズ村からは全くといっていいほど離れていない。
というか、村から密林が見えてしまっている。

その日の朝。

龍は気持ちのよい明るい日差しを受け（最も龍本人にとっては迷惑極まりないが）、その日差しを避けるために寝返りをうったのが間違っていた。

寝ていたベッドの端にでもいたのだろう。

寝返りをうった、その瞬間に浮遊感を覚え、気づいた時にはすでに遅し。

龍は大切な人生のファーストキスを床としてしまった。

しかし、彼は起きる気配は全くない。先程のファーストキスが余程嬉しくて余韻に浸っているのか、または、落ちた衝撃で気絶してしまったのか？勿論、後者ではあるが。

この衝撃で気絶……というよりはむしろ、ただ目が覚めていなくて落ちたことさえ気づいていないのだろう。先程の浮遊感も今の龍にとっては夢で空を飛んでいることであろう。

そんな龍の幸せなキスタ임も終わりを告げる。

ドタドタドタとなにやら龍の家の中を走る音がする。その音は次第に大きくなっていき、遂には階段を登る音になってしまった。勿論、龍は気づいていない。

ここで、龍の家の構造を説明しよう。

今、龍がいる部屋は2階に位置している。

2階には4つの部屋があり、使われているのは2部屋しかない。

1つは龍、もう1つは龍とともにハンターの道を選んで生活をしている龍の親友“ギル”の部屋である。

ギルは龍と同年で16才。体格はがっしりしていて、龍よりは力持ち　という感じがする。しかし、性格が問題……いや、これは後で説明するでしょう。

そして1階。

キッチンから風呂場、リビングもある。

2階にある部屋もそうだが、この家はとても広い。

上質な木材で作られ、ハンターとして生活しやすいように、武器、防具の手入れ専用の部屋まで設置されている。

実は2人　龍とギルはこのラングノーズ村の唯一のハンターなのである。

元々、セレスティアから近い場所にあるこの村は、モンスターの出

現も村の人間よりもギルドが先に見つけてしまい、すぐにクエストが出来上がり、ハンターがいなくても安全な生活を送っていた村なのである。

ところが今現在。謎の事件が発生。

セレスティアに住むハンターだけが1人、また1人と消えて行くのである。

クエストを契約し、狩猟に出掛けるハンター。

しかしそのハンターはいつになっても帰って来ない。

ギルドナイトが搜索しても、武器や防具の欠片もなく、死体1つない。

普通は、クエストに行つてある程度経つと死亡扱いとされ、クエスト失敗になるのだが、こうも行方不明が続くと流石にギルドも警戒する。

こうして少なくなったハンターは、ラングノーズ村周辺の弱いモンスターを狩る余裕もなくなってしまい、龍達のような人間が必要となるのだ。

そんな彼等に村長が作つてあげたのがこの家である。

そして、先程の足音だが………。

ドタドタと階段を登ってくる。

その人物は、龍に用があるのか、それともギルに用があるのか？

それはさておき、流石にここまで自分の家を走り回られては、寝坊助の龍も寝てはいられない。

のだが、やはり起きる気配………というか動く気配すらしない。

その足音をたてている人物がとうとう2階に到達したようだ。

『ドン』という大きな足音とともに、「龍ー！」という声がする。

彼　ラティルは20代くらいの顔立ちで、耳は長く尖り、頭の形も人間とは違い少し縦におおきい。

ラティルはこのラングノーズ村の村長にして、竜人族という人間とは違う種族である。

ラティルは「大変だよー！」と間髪を入れずに叫び、体を龍のいる方向に捻る。

………だが。

捻った瞬間、軸となっていた右足が『グキッ』という、とても爽やかな音をたてる。

ラティル

「龍ー！って、おろ？わっ！わっ！つと、つと……これって、落ち！落ち！落………うわあああああ！……！」

近所迷惑である。

しかし、階段を物凄い勢いで転げ落ちてもメゲることのないラテイル。

再び、物凄い勢いで階段を上り、龍の部屋のドアノブに手をかける。ここでもう1度、まあ、2度、3度でもいいが、階段を再び転げ落ちるということはなかった。

空気を読んでくれなくて残念である。

そして、ラテイルは龍のドアを思い切り開ける。

ここで、豆知識。

ドアノブはドアの左についていて押すタイプのものだ。開けると、ドアは右に開くことになる。

そして、龍のいるベッド。それはドアのすぐ右側の部屋の隅にいてある。そして頭はドア側の方になっている。

さて？おわかりいただけだろうか？

只今、龍は『床とどれだけ、キスが出来るか選手権？』中である。

勿論、そのドアは勢いを止めることなく、『ゴッ』という鈍い音がし、龍の頭に直撃。

龍の『床とどれだけ、キスが出来るか選手権？』は強制的に終了となり、ドアとベッドにサンドイッチにされてしまった

その感触はラテイルにも分かったのだろう。
ドアをゆっくりと引き、その影から龍を見る。

ラティルは体の全身から冷や汗が滞りなく吹き出している。

龍

「うおっ！！いつてええええええ！！」

近所迷惑である。

少し遅れて、この叫び。

龍は何事かと、頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。
憎悪95%、疑問5%で。

龍はラティルがドアの影から自分を覗いているのを見て、大体のこととは理解した。一応、頭はいいのである。

ゆっくりと歩き出し、ゆっくりと左手を伸ばしラティルの肩に置く。
そして、ニコニコ笑顔でゆーうううううと「ラーイーティ
ーイールイー？」と声を出す。

ラティルはとうとう体が震えだし、言い訳を言う。

ラティル

「あー。あのー……。龍さん？あのですね？これは故意にやったことではなくてですね。事故というか不注i（ry「うるせえ！！！！」オプス！！！！」

龍の右ストレートによって、ラティルは吹っ飛んで行き、本日2回目
目の階段から落ちるのを体験したのであった。

もう1度いうが、近所迷惑である。

†第2話 密林の異変（前書き）

龍がおとなしくなっ
たようです

「第2話 密林の異変」

龍

「ったく。人の家に勝手に上がり込みやがって……。」

ラティル

「ごめんごめん。でも一大事なんだよ!!」

ラティルは今、1階にあるリビングで椅子に座りながら、龍が出してくれた珈琲を口になっている。

龍はキッチンにたち、なにやら料理をしている。

『ジュー!!』という音と共に、香ばしい匂いがリビングの中に漂う。

龍

「なんか、密林とかに出たのか？」

料理を終えたらしい龍が、皿を持って椅子に座る。皿をテーブルの上に置き、先程ついでに入れた自分のレモンティーを口にする。

ラティル

「まだ珈琲は口に合わないのかい？」

と関係ない話をしてくる。一大事じゃなかったのかよ・・・と頭の中で思い、「ちょっとまだ苦くて飲めないな」と返事しておく。

ラティル

「実は、密林にブルファンゴの群れが出現してね・・・。大至急、10匹程狩って貰いたいんだよ。」

龍

「ふーん。ブルファンゴねえ・・・。」

と、先程作った『頑固パン+アプトノスのベーコンエッグ』を口にする。

龍

「ブルファンゴなら俺1人でも大丈夫だろ。ギルのやつを起こさなくてもいいか。」

ラティル

「大丈夫かい？いくら小型のモンスターとはいえ、あの気性の荒いブルファンゴだよ？」

龍

「10匹なんだろう？大丈夫大丈夫。」じゃあ、ちょっと準備してくるから。

と言い、空になった皿とカップを重ねるとリビングから出ていった。

ラティル

「頼もしくもなったねえー。龍君も。」

その後、一通りの準備を終えた龍は、契約金をラティルに払い、家を出て行った。

†第3話 ブルファンゴ（前書き）

この小説初めての狩猟風景です！

十第3話 ブルファンゴ

ここは密林。

様々な種類の植物が生い茂り、木が邪魔で、全く剣を振れない場所もある。こんな場所でも飛竜が出るというのだから驚きだ。

龍は今、岩の隅にいた。いたというか、標的　ブルファンゴの攻撃を受けないために不意打ちをするために隠れているのだ。

しばらくすると、『パキパキ』と、地面に落ちている小枝を踏む音がした。

その音は次第に大きくなり、龍の隠れている岩影まで近づいてきているようだ。

ブルファンゴは何やら鼻を動かし、地面すれすれで匂いを嗅いでいる。

餌を探しているのか、それともハンターを見つける為か。

定かではないが、ブルファンゴは着々と龍のいる岩影に近づいている。

龍は背中に背負っている愛刀　鉄刀に手をかける。

そして、しゃがんだ状態からゆっくりと立ち上がり、そろり、そろりと岩影のギリギリまで、近づいて行く。

ブルファンゴは龍の存在に気付くことなく、真っ直ぐ歩いている。呑気に鼻を動かし、ハンターのことも忘れているのだろう。

そして、とうとう岩影に隠れている龍の視界にブルファンゴが現れる。

その姿は猪である。
これしかない。

頭についている大きな牙が2本あること以外はどこからどうみても猪にしか見えない。

そして、その瞬間

龍

「うおおおおおおー!!」

という叫び声が密林に響き渡る。

龍は一瞬のうちに岩影から飛び出し、ブルファンゴに斬り下ろしの一撃を叩き込む。

走りながら抜刀することによって、運動エネルギーが増し、斬りつける強さも上昇する。

そのいきなりの攻撃にブルファンゴも何事かわからず、怯んでしまった。

「これはチャンス・・・」と思った龍は、下がることはせずに、太刀を振り下ろした勢いを殺さず、突きを繰り出す。更に切り上げ、連続技を決めていく。

そして、再び斬り下ろす。

その頃には既にブルファンゴは龍の方向を向いていた。

龍はその微妙な瞬間を見抜き、斬り下ろした後は巧みに斬り下がり、ブルファンゴと距離をとる・・・と同時に、左に向かって回転する。・・・と、ブルファンゴは先程まで龍がいた場所に向かって突進を始めた。そしてそのまま岩にぶつかり、突進が止まる。

その時にはすでに龍はブルファンゴの背後に位置し、突進が終わると同時にブルファンゴに先程のような連続技を決めていく。そして、ブルファンゴは数回の斬撃によって絶命した。

だが、龍は武器を収納せずに今度は右に回避を行う。

突然、龍の背後からもう1匹のブルファンゴが突進してきた。ブルファンゴは先程のブルファンゴの死体の手前で止まり、ゆっくりと龍のいる方向を向く。

龍はゆっくりとブルファンゴを中心の円のように歩く。

そして、ブルファンゴの突進と共に回避をし、突進が終わったと同時に太刀で斬りつける。

今度は一撃では怯まず、突き、斬り上げたところで怯んだ。

先程、怯んだ時よりも与えたダメージは大きい。
龍は再び連続技を決め、六撃目の斬り下がりをしたところでブルフ
アングは絶命した。

龍は鉄刀を背中の鞘に納める。そして、龍は背中の腰部分にある鉄
刀とは別の刀　短刀を取り出す。
そして、その短刀でブルフアング2頭を解体してゆく。
皮を剥ぎ、肉を切り分け、骨を分割する。

この短刀は攻撃用ではない。剥ぎ取り用ナイフである。倒したモン
スターを解体できるように切れ味はかなりよいが、モンスターを倒
す程には至らない。

今、龍が入手した素材は、
ブルフアングの毛皮×2
生肉×4
獣骨×4
である。

龍

「これで8匹目と・・・」

と、呟きながら素材をポーチにしまふ。

そして、同時にポーチから円盤状の大きな石を取り出す。

龍はその石の蓋を開け、その中からY字型の鉄の棒を2つと、拳大の石を2つ、そして取っ手のある棒を一本、更に折りたたみ式の椅子を取り出す。

龍はまず、蓋をひっくり返して、その状態で蓋を閉める。

上から見ると、円の形の両側に突起が出ている感じで、その突起と円の中心に窪みがある。

その次に龍は周りから小枝などを集め、中央の窪みに入れ、拳大の石　火打ち石で小枝に火をつける。

この火打ち石は、燃石炭という大砲や加治屋で使う火薬の材料と、鉄鉱石を溶かして混ぜて作ったもので、強く打ちつけるだけで簡単に火がつくものだ。

十分に火がついたところで、更に小枝などを追加し、両側にある突起の窪みにY字型の棒を挿して立てる。

更に、先程ブルファンゴから剥ぎ取った生肉を取り出し、その骨に取っ手つきの棒を装着。

その生肉をY字型の棒に乗せ、龍は椅子に座り、そして・・・

龍

「テッテッテッテッ　テッテテ　テテテ　テッテテ　テテテ　テ
テテッ　テテテッ　テテテッ　テテテッ　テテテテテ・・・

つと、上手に焼けました。」

と、ギルドが提案したと言われる『肉焼きセット』を使い、『肉焼きの歌』を鼻歌で歌いながら、龍がしているのは、見ればわかるが肉焼きである。このリズムで焼けば、上手にこんがり肉を焼くことが出来、初心者ハンターによく愛されている。

辺りには香ばしい匂いが立ち込め、下手をすれば腹を空かしたランポスなんかが近寄ってくるかもしれない。

最も目撃情報がないからいないとは思うが・・・。

龍は2つ目の肉を焼き終わると、付属の塩胡椒を振りかけ、豪快に肉を貪り食う。

出発したのが、8時くらいで、今は9時。

朝に食べたあの『アプトノスのベーコンエッグ』では足りなかったのか、それともただ単に狩りに疲れたのか。
理由はわからないが、空腹なのは確かである。

こんがり肉を食べ終えた龍は、地面に骨を埋め立ち上がる。

龍

「腹ごしらえも終わったし、残りは2匹か・・・」

と、独り言を呟き再びブルファンゴを探しに歩き出す。

龍

「ブルファンゴを狩ったら鉱石とか虫でも最終すつかな・・・。
この頃足りなくなってきたしな・・・。」

龍の狩猟風景はいつもこんな感じである。

†第4話 帰還（前書き）

更新遅くなりました

すいませんm（――）m

GWは遊んでたので更新忘れてましたwwwwww

十第4話 帰還

ブルファンゴを10匹狩りクエストを終えた龍は、帰路についていた。

密林とラングノーズ村道を繋ぐ道は、木々が生い茂る林を切り開いて作ったもので、幅は1メートルない。距離は徒歩で5分程度。まだ12時前なので日差しは木々の葉に遮られ木漏れ日となり、優しく暖かい。

言い忘れたが、今の季節は温暖期である。

この世界は、

温暖期 繁殖温暖期 寒冷期 繁殖冷期 温暖期
というふうに季節が流れている。

繁殖温暖期は2ヶ月間

（現代では4月、5月）

温暖期は3ヶ月間

（現代では6月～8月）

繁殖冷期は2ヶ月間

（現代では9月、10月）

寒冷期は5ヶ月間

（現代では11月～3月）

を指す。

繁殖期 繁殖暖期と繁殖冷期を合わせてそう言う では、文字通りモンスターの繁殖行動が活発になる期間である。しかし、そのために自分の子ども 卵だが を守るために凶暴化することが多い。

繁殖暖期では主に温暖期に活動するモンスター、繁殖冷期では主に寒冷期に活動するモンスターの繁殖行動が盛んになる。

また、繁殖期と温暖期は日にちにすると30日、寒冷期は31日ある。

そして、『 期の ケ月目』と言ったりする。

季節の説明が終わったところで、龍がラングノーズ村に帰ってきた。

龍はラティルにクエストが終わったことを伝えようと、自分の家のリビングに向かう。

しかし、そこにはラティルの姿はなかった。

その後、龍は自分の部屋とギルの部屋を確認するが、そのどちらにもラティルの姿はなかった。それどころかギルの姿もない。

龍

「あれ？ギルもいないとなると2人は酒場にでもいるのかな？」

勿論だが、この村にも酒場はある。

と言っても、セレスティアほどハンターはいない　　というか、2人しかハンターがいないので、酒場を賑わせているのは、村に住んでいる中年の親父や、この時期には暇をしている一部の商人ぐらいだ。

あとは、ラティルとかギルとか。

龍はまず、武器と防具の手入れをしようとした。

武器は念入りに砥石で使い、清潔な布で磨く。

防具は家の風呂場に置いてきたが、すでにシャワーでゴミや土を落とし、こちらも清潔な布で丁寧に拭いていた。

そのついでに、龍は風呂でシャワーを浴びた。

さっきまで湿度と気温の高いところにいたので、体は汗まみれであった。

さっぱりしたところで龍は再び狩猟の準備をする。

酒場で何か新しい依頼が来ていても、ちゃんと対応出来るためだ。

ギルもそのせいで家にいないのかもしれない。

回復薬、砥石、こんがり肉……

一通りのアイテムをポーチに入れると武器、防具を装備し家を出た。

†第5話 また異変！？Part 1（前書き）

前回は短かったです、今回は長い方だともいます。

やっどヒロインが2人登場します。

ただ、作品紹介でクネクネしてた女の子ではありません。

あと、言い忘れてましたが、作者の想像力は限りなく乏しいです。

ので、性格から頑張って容姿を浮かべてください。

＋第5話　また異変！？Part 1

龍は家を出て、広場の奥にある酒場に向かう。

広場の真ん中には大きいとも小さいともいえない噴水がある。

そして、酒場の裏には立派な大木がそそりたっている。

この大木は何百年も前からここにあり、ずっとこのラングノーズ村を見守ってきたらしい。

その神話（言い伝え）を信じ、ラングノーズ村の人達はこの大木を“神木”や“世界樹”と呼んでいる。

また、言い伝えによると、この大木はある人が種から育てたらしい。その人の名前をとって、“ミリア”と呼んでいる人もいる。

中には、ミリア様と様づけで呼んだり、毎朝かかさず神木に話しかけている人もいる。

龍もその神木を見ながら『おはよう』と呟く。

そして龍は酒場に入っていた。

ラングノーズ村の酒場は、普通は夜6時くらいから賑わう。

前話でも書いたが、ハンターも龍とギルしかいなく、昼は殆ど客が来なくて、今来るのは料理のできない一部の人がらいである。

なので、今は静かなはず・・・だが、何故か賑わっている　とい
うか騒がしい。
いるのは3人。

それはカウンターで客に酒や料理を出すメイド服を来た女性　い
わゆるギルド嬢と、2人の馬鹿だった。

馬鹿1号^{ギル}

「レナちゃん！！付き合ってくれー！！」

ギルは、そう言って両手を広げると、唇をすぼめ、レナと呼ばれた
女性を抱きしめようとカウンターに乗り出す。その顔の頬はうつす
ら赤くなっており、右手にあるジョッキを見る限り酒を飲んでたらし
しい。

レナはその抱きつきを華麗に避け、持っていたトレイでおもいつき
りギルの頭を叩く。
そのせいで、ギルは顎をカウンターに強くうち、軽い脳震盪をおこ
す。

馬鹿2号^{ラティル}

「あつはつはっひゃひゃ！！またふりやれたねギル君！！」

ラティルもその笑い方と話し方、右手のジョッキを見ると、酒を飲

んでいたようだ。

ギル

「絶対後で後悔するんだからな!!」

レナ

「生憎ギルみたいな人は好みじゃないの。……ていうか五月蠅い。黙れ。帰れ。」

ギル

「うわあああああん!!!!!!!!!!」

ギルは泣きながらカウンターに再び突っ伏した。

と、その時。

?

「あら?ギルさんに村長さん?こんな昼間からどうしたんですか?」

先程のそっけないレナとは違い、優しい感じの声がする。そこには、優しい笑顔でなにやら書類を持った女の子がいた。

ギル

「ルナちゃん！！レナがいじめるー！！」

そう言つて、ギルはルナと呼ばれた女性の腰に抱きつく。

ルナはそんなギルの頭を「よしよし」と言つて撫でてやった。

ルナはレナと双子の姉妹で龍と同じ16歳。

2人はラングノーズ村の酒場を経営する姉妹でもある。

親はいない。昔2人が小さい時にモンスターに襲われたらしい。

それまでは、各地を飛び回る移動式の食事屋みたいなものをやっていたらしい。

姉のレナはツンツンしていて（デレはないです）、この酒場に来る人にも無愛想に振る舞う（勿論デレはないです）。

普通に話すのは龍にギルにラティルぐらいだが、この3人と話す時も笑顔を見せることはまずない（しつこいようですが、デレることはありません）。

ただ、妹のルナだけには優しい（デレです）。というか可愛くなる（デレます）。ルナの性格のせいもあるが、リズムが崩れたり、赤くなったりする（レズ？知らん。ただしデレまくりです）。

そんなレナと違い、妹のルナは優しく、酒場に来る客にも龍達にも笑顔で接する娘である。

料理はレナの方が上手く（というか美味すぎる）、客の気もレナに無いわけではないが、ルナの方があつたりする。部屋も龍達が見

に行ったことがあるが、ルナは予想通り綺麗な部屋だった。レナの部屋は一瞬物置かなんかに間違えそうになったこともある。出来た妹である。

ルナ

「あらあら。お姉様？駄目ですよ？この村のハンターさんに意地悪しては？」

レナ

「だっ、だって・・・五月蠅いんだもん。抱き付いてくるし・・・」

ルナ

「そんな態度じゃ嫌われますよ。」

ギル

「そうだそう痛　っ！！」

再びギルの頭がトレイで叩かれる。

レナ

「結構結構。あたしが嫌いになったんならもつここには来るなよ。」

ギル

「ひどいやっ―!!」

ギルは再びルナに抱きついた。

レナ

「ところでどうしたの？今日の昼はあたしが当番だったと思うけど？」

夜は忙しくなるので、2人で仕事をしているが、昼の少数の客や龍達の依頼の管理は1日ずつ交代でやっているらしい。

ルナはギルを撫でながら答える。

ルナ

「あ・・・あのですね・・・。お店の食材の在庫が少なくなってきたので、仕入先の書類を書いてたんですけど、分からなくなってしまったので、お姉様にお願ひしようかと・・・。」

そついつと俯き、悲しそうな顔をする。

料理などはルナが担当することが多いが、在庫管理や資金管理はレナが担当することが多いらしい。というかルナが苦手なためである。

先程も書いたが、レナはルナにデレまくりなのであります。
断れることなど・・・

レナ

「え？え・・・えっと、ルナ？お姉ちゃんがやってあげるから泣かないで？」

ルナ

「ホントですか！？有難うございます！お姉様！」

そのまんえんの笑みにレナは・・・

レナ

「っ／＼べ、別にお礼なんかいいわよっ／＼」

ギル

「うわっ！！デレた！！ひでえや！！レズd（ry）ぶっ！！！！」

メイド服を来ているのにも関わらず、華麗な回し蹴りがギルの頭を直撃する。

ギルはルナの体から離れ、近くにあった木のテーブルまで吹っ飛んだ。

ギル

「し……白……白……か……ぐふつ。わ・
・我、一生に悔いなし……がくつ。」

ギルは死んだ。

龍は静かに手を合わせた。

レナ

「じゃあ、このゴミ捨ててくるから。ルナ。店お願い。」

ルナ

「は……はい。わかりました……。あの……。お姉
様？ギルさんはゴミでは「ゴミよ」……。」「

レナのきつい三文字によって、ルナは渋々とカウンターの中に入ると、いつの間にか寝ていたラティルを起こそうとする。

レナはゴミ（ギルです）を捨てる為に入り口に向かう。

入り口には龍が立っているわけで、必然的にレナの視界に龍がはい
る。

レナ

「あれ？龍じゃない？依頼終わったの？……。てゆうか、

その“人を遠くに見るような目”は何？」

龍

「ああ……。そのゴミが醜態晒してたみたいだからお疲れ様ってこと。レナに対してじゃないから、そこんところろしく。」

レナ

「そう。ならいいのよ。」

と言つて酒場から出ようとする。それを龍は引き止めて話を続ける。

龍

「あと……。そのゴミ。俺が捨ててこようか？」

レナ

「え？ああ……。いいの？それなら（ry「龍様！！！！」……え？」

龍を様づけで呼んだ張本人　ルナがラティルを起こすのも放置して、龍に駆け寄る。

そして、両手で龍の両手を掴み、まんえんの笑みで話を続ける。

ルナ

「依頼が終わったんですか？あ……あの……お疲れですよね？何か出すので……ギルさんはお姉様に任せて何か食べませんか？」

何故か、龍を様づけで呼び、あの礼儀正しい態度も龍の前ではあせあせしている。

もうそれがなんであるかはレナやギルには分かっているのだが、龍はさっぱりである。

龍

「え？でもレナに悪いし……」

レナ

「大丈夫よ。私が行ってくるわ。」

龍

「そ……そうか？ならいいんだが……」

レナ

「じゃあ行ってくるわ。ルナ、頑張りな。」

ルナ

「お……お姉様!!」

龍

「??」

龍がルナの方角を見たのを確認すると、レナはルナに応援の一言と、
ウィンクをプレゼントする。

それにルナは頬を赤くして焦ってレナを注意する。

レナはゴミをひきずりながらどこかへと去って行った。

†第6話 また異変！？Part 2（前書き）

なんかこの頃だるい

＋第6話　また異変！？Part 2

龍はルナに引かれ、カウンターに座る。

ルナはすぐにカウンターのの中に入り、ランゲノーズ村産のリンゴジュースを龍の前に置く。

ルナ

「龍様はたしかアルコール系は苦手でしたね？リンゴジュースでよかったですか？」

龍

「ああ……。俺はギルほどアルコールに強くないからな。覚えてくれてありがとな。」

ルナ

「いついえ！！当然のことをしたまでです！！」

龍がありがとうと礼を言うと、ルナは“ボンツ！”という音とともに顔が真っ赤になり、もじもじしながらその礼を返す。

ちなみに、この世界では酒、ビール、ワインなど、アルコールが入ったものでも未成年が飲むことが出来る。

特にハンターは優遇されることが多い。

1本で10000Z以上もする高級ワインがハンター専用のもの

だったり、同じ歳でもハンターと一般人ではハンターだけに酒を出す村もある。

龍は16歳。

しかもハンターであり、ギルより強くないといっても、人並みに酒は飲める。

だが、龍は酒を嫌う。

味が苦手でも、匂いが苦手でもない。
ただ、単に飲まないだけなのである。

ルナ

「今回の狩猟はどうでしたか？」

龍

「ん？ああ……。うん。特に怪我は無く、無事終わったよ。
ブルファンゴ10頭だったからちよつと時間がかかったけど。」

ルナ

「ブルファンゴですか！？あんな狂暴なモンスターを狩れるなんて、やっぱり龍様は凄いですね！！更に、1人で10頭だなんて……。」

龍

「いや……。まだまだだよ。世界には銀色に光るリオレウスとか、極限に熱い火山でリオレウスの何倍もあるグラビモスとかも狩

つてるハンターがいるんだ。中型のモンスターさえ狩ったことのない俺なんてまだまだ駆け出しだよ。」

ルナ

「そ．．．そうなんですか．．．．．でもやっぱり凄いですよ。ラングノーズ村に滞在しているハンターは2人だけですし、この辺りにはそんな狂暴なモンスターも出ないので、龍様がいられるだけでも心強いです！！」

龍

「そっそうか？ありがとな。」

龍もルナに自分のことを褒められて、顔を赤くする。

このように、龍はここにくると、リンゴジュースを飲みながらルナといろんな話をする。

龍は狩猟のこと。

ルナはレナや酒場でのことをよく話す。又、ラングノーズ村で最近起きたことなども話すことがある。

龍はハンター。

狩猟で何日も村をあけることがある。

そのようなときに、ルナが龍に様々なことを話してあげるのだ。

そのように楽しい話をしていると、『ギシッ』という音が入口でたつ。ラングノーズ村は発展途上の村なので、コンクリートで出来た家は

ない。ので、すべてが木で出来た建物となっている。ちなみに、素材は最高のものである。

ルナ

「いらっしやいま・・・ってお姉様？なんですか、その服の汚れは・・・？」

龍

「途中であのゴミが目を覚まして、暴れたとか？」

龍は笑いながらレナに問う。

レナ

「残念ながらハ・ズ・レ。あのゴミは今頃、農場の肥料になっているんじゃない？」

龍

「ハハハ！！だから服に土汚れがついてるのか！！」

レナ

「そゆこと。じゃあ私は着替えて、仕入先の書類とか書くからお願いいルナ？」

レナは先程ルナが持ってきた書類を持つと、店の奥に入っていく。

ルナ

「わかりました。お願いしますお姉様。」

レナ

「うん。あとそこにいるもう一匹の馬鹿が龍に用事あるって言うてたから、頃合を見て起こしなよ。」

龍

「りょーかい。頑張れよ。」

『どうもー』と言いながら、レナは店の奥に入っていった。

† 第7話 また異変！？Part 3（前書き）

ルナは龍に……………

なんか1話1話短いすかね？
よければ感想ください。

それにおおじて改善していきたいですので。

＋第7話　また異変！？Part 3

レナが店からいなくなってから、約1時間が経った。

レナが狩猟やモンスターのことを詳しく聞きたいと言ったので、龍は今回のブルファンゴ戦のことをはじめ、飛竜と呼ばれるモンスターのこと、最近まで伝説だと思われていた古龍のこと、そしてシュレイド伝説にある災厄のこと。

ハンターの間ではかなり興味深い話だが、レナは酒場を経営するただの一般人。

龍にはルナが楽しいかどうかはわからなかった。

龍

「なあ・・・・・・・・・・？」

ルナ

「なんですか？龍様？」

龍

「こんなモンスターの話とか聞いてて楽しいか？」

ルナ

「はい！！楽しいですよ？」

龍

「そうか……。ルナも年頃の女の子だから、服とかそうゆうお洒落のほうに興味あるのになって思っただけど……。」

ルナ

「そっそっすねっ／＼それも楽しそっすけど、龍様の話の方が私にとって楽しいです／＼」

年頃の女の子と言われ、お洒落のことを話題にされ、嬉しさと恥ずかしさでルナの顔が赤くなる。

龍

「そうなのか……。ルナはもしかしたらハンターに向いてるのかもな？」

ルナ

「そっそっすか！？龍様にそっ言ってもらえると嬉しいです！」

龍

「まあ、本当にモンスターが狩れるかは分からんけどな。」

龍は笑いながらルナをからかう。

ルナ

「ひっ酷いです！！ハンターになって、その気になれば、リ・・・リオレウス・・・・・ではなくてランポス・・・・・いや！！アプトノスぐらいなら勝てます！！」

ルナは頬を膨らませ、龍に反論する。

もはや、狩れる狩れないの話ではなく、勝つか負けるかの話になっているのはつつこんではならないと龍は瞬時に感じとる。

更に、アプトノスなんてハンターでなくても狩れるなんて口を裂けても言えない。

龍

「あー。悪かったよ。ルナは出来る子だ。」

龍は頭を掻きながらルナの子どものような態度に対応する。

そうすると、ルナはまんえんの笑みを浮かべ、

ルナ

「そうですよ！！分かればいいんです！！」

と胸をはって威張る。

龍はそのはられた胸に目がいくのは、青年男児にとって仕方がないもので……。

そして、いつの間にか若干キャラが違くなっているはおいといて、先程の怒っているルナが可愛く見えたのも内緒である。

今の時刻は午後4時。

龍がここに来てから3時間以上は経っている。

ルナ

「龍様？そろそろ村長さんを起こした方がいいでしょうか？」

ラティルがつぶれてから約2時間。

酒で酔っているといっても2時間も熟睡していても酔いは冷めていくはずだ。

ルナはレナに言われたとおり、そろそろラティルを起こそうとカウンターから出る。

と、そこで酒場の入口から『ギイ……』と言う音がする。

そこには人間の形をした何かがいた。

体と思われる部分には土がこびりつき、人間の肌の肌色はなく、代わりに黒か茶色になっている。

頭と思われる部分には鳶^{ツタ}が数本絡みついており、目が1つ見えるだけで顔は確認できない。

その生物が酒場に入ってきてルナの動きが止まった。
10秒ほど時間が止まる。

そして

ルナ

「キヤアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

ソプラノ歌手でも驚くほど、かん高い声は一生のうちには聞けないだろう。

龍はその叫びとほぼ同時にルナを抱きかかえ、店の奥へと続く扉を開けその中にルナを避難させる。

龍

「もし何かあったらレナとそっちから逃げてくれ！！」

店の奥には、事務室的な部屋や食料の倉庫、休憩室などがあるが、事務室にはもう一つの外へと通じる扉があり、そこからも出入りすることが出来る。

そこから出入りするのレナルナ姉妹とその親友のである龍とギルくらいであるが。

先程のルナの悲鳴によって、何人かの村人が酒場に集まってきた。酒場に入った途端、『うわっ！！なんだこいつ！！』とか『新種のモンスターか！！』という声がある。

その間にもその生物は龍の方に『うう・・・』とか『ああ・・・』と言って、近づいている。

龍

「なんだお前は！！」

龍はそう言って太刀を構える。

その行動に驚いたのかその生物は焦って声をあげる。

？

「ちょー！！危ねーな！！俺だよ俺！！ギルだって！！」

龍

「ギル？確かに声はギルだな・・・。」

ギル

「気づいたら畑に埋まって、顔に蔦が巻き付いてるんだよ!!
龍!!とつてくr(ry」余計な騒ぎをおこすんじゃない?」ゴ
ファ!!」

龍の華麗なアッパーがギルらしきものの顎を捉え、ギルは後方に吹
っ飛んだ。

ギル

「ど……どうせなら……レナのパンチラキックが……良か
………った………。ガクッ。」

ギルは永眠したようだ。

龍はギルを抱えて酒場を出て、近くに流れる川に沈めておいた。
もう二度と出てくるなという気持ちを含めて。

†第8話 また異変！？Part 4（前書き）

1年半ぶりの更新です。

これからちよくちよく更新したいです

＋第8話　また異変！？Part 4

龍はゴミ　　もといギルを始末すると酒場に帰ってきた。

酒場の入口にいた人々は先程の龍とギルのコント？を見てか、危険はないと分かり、それぞれのいた場所に帰って行ったようで、誰もいなかった。

酒場に入ると床はギ　　ゴミがもってきた土や蔦で汚れていた。

龍は慣れた手つきでカウンターのの中から雑巾を3枚ほど持ってくる
と再び酒場の近くに流れている川まで行き、水に浸し絞った。

この川はこの村の近くにある1つの狩猟場所　通称、森丘と呼ば
れている所から湧き出ている水が川となりラングノーズ村にも通っ
ているのだ。

ただ、その森丘はラングノーズ村よりも遠い所にあり、どちらかとい
うとセレスティアの方が森丘から近い位置にあるのだが、自然の
造形した傾斜と岩々によってセレスティア側ではなくラングノーズ
村の方に流れてくるのだ。

龍は雑巾を3枚とも水を浸すと酒場まで戻っていく。

途中で、

龍

「川で水死体のような汚いゴミがあつた気がするけど……。うん。見なかったことにしよう。うん。それがいい。」

と独り言のように呟く。

龍は酒場に戻ると、先程の雑巾で丁寧^{ていねい}に床やテーブルを拭いていく。薦^{すす}は丁寧に取り除き、土汚れのあるところは2回ほど拭いておく。

ある程度キレイになり、ルナとレナを呼ぶためにカウンター横にある従業員用の　まあレナとルナの家に直接繋がっている扉を開けた。

……そこには既にルナとレナが武器を手に待機していた。

龍

「あの……。レナさん？ルナの筈はまだ可愛らしいとして包丁を手にするのは駄目なのでは……？」

レナ

「だ、だって不審者が！」

龍

「ああ……」
“ギル”
「だっ
たらそ
こでの
びてる
よ。」

レナ

「へっ？ ギ、ギル？」

と拍子つかれたように声をあげると龍をどかし、店の中に入る。それに俺とルナも続き肩を震わせているレナに目を向ける。

レナ

「ふ……フッフッフ……。アハハハハハハハハハハハハ！」

龍・ルナ

「ビクッ！」

突然笑い出したレナに俺達は恐怖と驚愕でふるえ出す。

レナ

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．．．。．．．．．ルナ？」

ルナ

「はひ！何でしょうかお姉様！？」

レナ

「ちょっとギルとデートしてくるから店のことお願いね？」

ルナ

「はいっ！わかりました！」

こんな時にデートなんていうのはレナなりのジョークだろう。

レナはギルの頭足を持つと、そのままギルを引きずり店から出て行った。

いや、出て逝ったか？

そしてそのギルの姿に龍は再び手を合わせるのであった。

↑第8話 また異変！？Part 4（後書き）

更新予定は明日！

↑第9話 依頼（前書き）

予告通り、12日に投稿出来ました。

「第9話 依頼」

ラティル

「いやー。僕が寝てる間に面白いことがあったみたいだねー？
残念だよ。ギル君の醜態が見れなくて。」

レナ

「お前もその醜態を晒していた奴の仲間だけだな。」

ラティル

「ヒドいね？僕は笑ってただけなのに。」

レナ

「十分キモい。」

ラティル

「・・・・・・・・。」

レナが店を出てからは、ルナと龍はカウンターに戻り談笑していた。

しばらく経って、レナが戻ってきてから 何故か拳が赤かった
未だにカウンターで寝ていて空気と化していたラティルを起こし
先程のような話になったのだ。

龍

「まあギルのことは置いて……俺に用事ってなんだ？」

ラティル

「ああ！実は龍君がブルファンゴの討ち、あ、そういえば報酬もらってねえや。早くよこせ」……」

「ん。」と手をラティルに向ける龍。

ラティル

「今喋ってたのに……。はい、報酬。」

と龍の手に通常報酬の800エクトに契約金の150エクトの2倍が足された1100エクトが置かれる。

龍

「確かに……。でなんだっけ？」

ラティル

「んー。本当ならギル君と一緒に聞いてもらったほうが助かるんだけど……」

龍

「大丈夫だ。問題ない。」

ラティル

「そ、そう？えっと、龍君がクエストで密林に行ってる間にね、クエストがはいつて来たんだよ……。それも2つ。」

龍

「2つ？なんだ？嫌がらせか？」

ラティル

「いや。1つは普通のクエスト。森丘で『ドスランポス』の討伐クエストだよ。」

龍

「遠いし、初狩猟です。どう見ても嫌がらせでした。本当にありがとうございました。」

ラティル

「いやいやいや。森丘は2日で着くでしょ？こっちは私が勝手に了承しちゃったんだけど、ドスランポスなら今の龍君とギル君で一緒になら楽勝でしょ？」

龍

「は？了承した？」

ラティル

「村長命令。いつまでも小型のモンスターばかり狩られてるだけじゃ困るからね。」

龍

「チツ。ずりいなそういう時だけ。」

ラティル

「まあまあ。んで本題はもう一つなんだけど……場所はこの村の近くじゃないけど、密林。討伐モンスターが……『イヤンクック』なんだ。」

龍

「は？無理無理無理！ドスランポスならまだなんとかなるとしてイヤンクックは無理だって！」

ラティル

「いやー。僕もそう言ったんだけどね？このクエスト、訳ありな依頼だね。セレスティアの近くにはあるんだけど、村が大変らしいんだよ。」

龍

「大変？だったらセレスティアのギルドナイトが動くんじゃないのか？万一にもまさかイヤンクックの討伐ごときの報酬が払えないわけないよな？」

この世界のクエストは実は種類がいくつかある。

1つは依頼がセレスティアに届き、それがギルドによって危険だと認められた場合、ギルドが報酬を払うもの。

2つ目はセレスティアのギルドに属するモンスター観測部隊が見つけた大型のモンスターの危害が大きい場合にそれをクエストとするもの。

もう1つはセレスティアが依頼を危険が低いと判断し、依頼として承諾はするが報酬は依頼主が払うものだ。

基本的に大型や上位種は1つ目、小型や行商人の護衛は後者だ。

またモンスターがギルドによって確認されない場合も3つ目になる。

龍が聞きたいのは、今回のクエストは村からセレスティアに依頼はいったはいいが、下位種であるのでギルドナイトはおるかギルド自体も動かない。なので村からクエストに見合うだけの報酬が払えるのかどうかということだ。

ラティル

「そのまさかさ。その村は少し前にあるモンスターに襲われてね。覚えてないかい？」

龍

「もしかして………。テオ・テスカトルの………?」

ラティル

「そう。その時は古龍だったからギルドナイトが動いたんだけどね?今回は金がないに加えて……。」

龍

「獣人の村だから。だろ?」

ラティル

「そうなんだ……。」

この世界の人間は大きく分けて4つの種族に分けられる。

1つはヒューマン。

身体的、肉体的にも平均的で、特に目立った特徴もない。

全人口の約70%を占める。

龍がこれ。

2つ目はドワーフ。

肉体的に優れていて、体がヒューマンより大きい。

全人口の約15%を占める。

ギルがこれ。

3つ目は竜人族。

耳が尖り、寿命が長い。

記憶力に優れていて頭が良いとされるが、肉体的には少し衰えている。

全人口の約10%を占める。

ラティルがこれ。

そして……、

4つ目が獣人族。

肉体的に優れていて、純血種は耳や尾が体についており、毛が生えている。

全人口の約5%を占める。

実はレナとルナはこのクォーター（25%が獣人族の血）。

ドワーフと竜人族はヒューマンと比較的友好的であるが、獣人族はどの種族よりも嫌われている傾向が強い。

龍

「……………」

ラティル

「無理に……とは言わないけど、取り敢えず依頼の全容を教えるね。」

龍

「ああ。」

龍がこれほど落ち込んでいるのは彼の両親が関係している。

今は穏やかではあるが、少し前は種族間の争いがよくあった。

10年前、ハンターであった龍の両親はあるクエストの最中、その標的を同じく狩ろうとしていた獣人族達によって殺された。ということがあった。

両親は獣人族を差別などしていなかったが、その事件により龍はラングノーズ村に来るまで獣人族のことが嫌いだった。

今はレナとルナのおかげでそう思うことも無くなったが（龍もレナとルナもお互いのことは知っている）、ラティルは一応その心配をしていたのであった。

ラティル

「依頼主はその村……クナル村の村長。契約金は0エクト、報酬金は……300エクト。場所はクナル村近くの密林。死体の匂いを嗅ぎつけたランポスにつられてイヤンクックがタマに村にくるらしい。」

レナ

「300エクトって・・・！」

ルナ

「龍様……………」

レナは報酬金の少なさに驚き、ルナは顔を手で覆い悩んでいる龍を心配する。

確かに今龍としてはその村を助けたい。

しかしイヤンクックとなれば、自分たちだけで狩れるのが心配だったのだ。

ラティル

「ちなみに村には生存者が5人いるんだけど、村長、鍛冶屋、ギルド嬢、村娘、そして……………ハンターが1人いるんだ。」

龍

「ハンターがいる？」

ラティル

「うん。ランクは龍君達と同じ1だけど、今回手伝ってくれるら

しいんだよ。」

龍

「そうなんだ……。わかった！そうゆうことなら引き受けるよ！」

ラティル

「本当かい！？実は復興までその5人にはこの村に来てもらおうともっていてね。龍君の返答次第だったんだけど、本当によかったよ！じゃあ手続きしてくるから！」

と、龍を置いて店を出て行くのであった。

龍

「ラティル行動早いな……。」

レナ

「じゃあ、私はギル連れてくるわ。」

龍

「お前も忙しいな……。つか今度はどこに置いてきたんだ？」

レナ

「ん？ちよつと農場にある木に縛り付けてあるけど．．．．．見る？」

龍

「イエ。遠慮シテオキマス。」

と店を出て行くレナ。

ルナ

「．．．．．やさしいですね龍様は。まだ戦ったことのないモンスターなのに．．．．．それに．．．。」

龍

「絶対に勝てる自信があるわけじゃないけど、いずれは戦うことになるからね．．．．．それに大丈夫。レナとルナに出会って変わったんだ。獣人だって、助けが必要なら手を貸すよ。」

ルナ

「フフ．．．．．。流石です。では龍様も準備なされたほうがいいのでは？」

龍

「そうだな。駄弁ってるわけにもいかないし．．．．．。じゃあまた。」

ルナ

「はい！」

と龍も準備をするために家に戻るのであった。

†第9話 依頼（後書き）

次回は不明・・・・・・・・。

今月中には更新したいな・・・・・・・・。

†第10話 森丘へ……………（前書き）

さて、セレスティアに向かおうとする龍とギルですが、いきなりト
ラブルが……………？

今回はギルに注目というかギルをいじってみました。

↑第10話 森丘へ……………

先程から約1時間がすぎ、酒場には既に龍が戻ってきていた。

龍が戻ってきてから、直ぐにギルもレナに引きずられてきたのだが血と土の汚れにより、ルナの「くさいです!」の一言により、鳴きながら家に走っていった。

おそらく水でも浴びに言ったのだらう。

龍は手入れをしておいたバトルシリーズで身を包み（レナの料理を食べているために頭の部位は外している）、横には鉄刀が置いてある。

これからセレスティアまで2日、ドスランポスの狩猟で1日、クナル村まで1日、更にイヤンクックの狩猟で1日、そして帰還で2日……………。

と、約1週間はラングノーズ村から離れることになる。

なので、龍はその間食べられないレナの料理を堪能しているのである。

龍

「ん…………。御馳走様。あー旨かった!1週間後も頼むわ。」

レナ

「う、うん／＼！任せて！」

ルナ

「うー……。お姉様！料理を教えてください！今すぐ！」

レナ

「ちょ！ま、待ってって！」

と嫉妬したルナは酒場に休業中の札を掛けると、レナを強引に連れ
2人の家へと消えていった。

ルナ

「あ！龍様！頑張って下さいね！」

龍

「お、おう……。。」

恋に燃えた女は強かった。

ギル

「あれ？2人は？」

龍

「お前の顔が見たくないからって家に入った。」

ギル

「え？え？嘘だよね？ねえ！」

龍

「だったら聞けばいいだろ？」

レナとルナが家に入ってから少し経つとギルが入ってきていきなり、2人のことを聞いてきた。

説明はしていなかったがギルは女好きであるので、それがいろいろと問題を起こすことがしばしばある。

ギル

「おーい！レナちゃん！ルナちゃん！」

.....。

ギル

「……………ルン」静かにしてください！今忙しいんです！」
「……………グスッ。」

龍

「ざまあです。」

ギル

「グスッ。」

ラティル

「おーい！準備出来たかい？そろそろ出発するよ！……………
って何この空気？」

龍

「ん……………まあ……………、大人しい娘が叫ぶと怖いってこ
とかな。」

ラティル

「？まあ、もう馬車が用意できたから来てよ！」

龍

「おう……………おいギル！逝くぞ！」

ギル

「字が違っだろ……グスン。」

ラティル

「じゃあまずはセレスティアに行つて、少しやすんでから森丘まで行つてドスランポスの狩猟をお願いね。」

龍

「おう！つかドスランポスは手伝つてくれないのか？」

ラティル

「そう言わないでくれよ。クナル村は壊滅的なんだ。イヤンクック狩るのだけでも道具使うんだから。」

龍

「わかつてるよ。まあこれも1つの試練だと思つて行くよ。」この世界のハンターは、初心者ハンターに対してドスランポスやド

スギアノスを初めての登竜門として狩獵を行うことが多い。
ドスファンゴに比べ狩りやすく、小型と中型の違いとして体に覚え
させる為である。

龍とギルも通っていたが、町には“ハンター養成学校”と呼ばれる
ものが存在する。10〜12才の子どもを入学対象とし、入学後（
試験は特にない）6年にわたり、狩りについての技術と知識を学ぶ
のだ。

その過程で養成学校はドスランポスを卒業試験に課する場合が大半
である。

しかし、龍とギルも共に同じグループとして頑張っていたが、運
がいいのか悪いのか最後の卒業試験は中型モンスターの狩獵ではな
かった。

というのも、その年はドスランポスの個体数が少なくランポスの個
体数が多かったので、必然的にランポスの大量討伐をせざるを得な
かったからだ。

そのことから今回は少し遅いドスランポスの初狩獵となってしまう
たのであった。

ラティル

「うん！頑張ってたね！・・・あ！クナル村の村長は個性的だけど
頑張ってたね！手紙送ったから、すぐ仲良くなると思っよ！」

龍

「嫌な予感しかしねえよ……………」

ギル

「質問！その村長の年齢を教えてください！」

ラティル

「18歳で女の子なんだけど・・・」キタアアアアアアアアアアアアアア「黙ってる！」グフアア！！？」・・・・・・・・・・」

ギル

「鳩尾は・・・・・・・・駄目だろ・・・・・・・・・・」

龍

「自重しろ。」

ギル

「だが俺は行く先に女の子がいる限」「次は金的逝つとくか？」
誠に申し訳御座いませんでした。」

ラティル

「アハハハハ！そのようじゃ大丈夫だね！すぐ仲良くなると思うよ！」

龍

ラングノーズ村を出発してから2時間……。

ギル

「ひ~~~~ま~~~~だ~~~~」

龍

「寝るか武器磨くかどっちかにしてろ！」

ギル

「しりとりしようぜ！じゃあ俺の好きなディアボロスから！龍！『す』だぞ『水冷弾』…………グスン。」

龍は出発してから、すぐに武器の手入れにかかっていた。武器や防具は大切に手入れすることが、一番重要である。それを邪魔したギルを適当にあしらひ、たった今防具の手入れも終了した。

それを見たのか、暇を持て余したギルはしぶしぶと自分の武器ハンマーを取り出す。

その名はスパイクハンマー。

龍の使っている鉄刀と同じく鉱石から生産したものだ。

ギルは砥石を取り出すとハンマーの全体を優しくこすりつけ汚れを取り除く。

ギルは龍ほど丁寧に、しかもこまめに手入れをしないので、若干汚れが目立つ。

しかし、前の戦闘で一度砥石を使ったのだろう。1回砥石をかけるだけで汚れは全く見えなくなった。

その後、ギルは皮で出来た布を取り出しそれを水で濡らしハンマーをこすりつける。

そして仕上げに麻で出来た乾いた布で吹いて武器の手入れは終わったようだ。

防具の方かというと、武器で気力を無くしたのか、諦めてしまっていた。

ちなみにギルの防具はランポスシリーズである。

そしていつの間にか寝ていた龍を見て、ギルも睡眠に入るのであった。

次の日・・・・・・・・

昨日からなにもなく、龍は持ってきていた雑誌を見ていた。

その雑誌はセレスティアが発行しているものである。モンスターの情報、村や町の情報、狩猟場の情報、古龍の特集、二つ名のあるハンマーの特集、アイドル的なハンマーの特集、流行りの防具特集・・・・・・・・など様々なことが載っている。

ちなみに毎週月曜日発行（ラングノーズ村には日曜日にセレスティアから送られ火曜日に届く）で定価380円。約300ページ。また毎号に同封されているくじがあり、回復薬から鉱石や虫などの素材、更には手に入りにくい秘薬や生命の粉塵なども当たることがある。

その雑誌を読み終えたのもかなり前。

正午になりかかろうとしていた頃、2人は再び寝ていた。

しかし・・・・・・・・。

「ハンターさん！ハンターさん！」

龍

「んあ・・・・・・・・？・・・・なんですか？モンスターですか？」

「いえ……。実はさっき通り過ぎた他の同業者に聞いたのですが、今から横切ろうとしていた砂漠なんです、なんでもディアボロスが2頭出たって噂で……。」

龍

「ディアボロス!?それはまた……。……でどうなっちゃうんですかね?」

「砂漠は危険なので、迂回して通る予定のなかった森丘の近くを通ろうと思うのですが……。」

龍

「それってもしかしたらもしかしくてもドスランポスの出る……。」

「はい。ハンターさん達がラングノーズ村で契約したクエストの場所です。」

龍

「となると狩った方がいいんですね……。」

「いえ……。近くだけで森丘には入りません。ただ、ハンターさん達にはセレスティアで休んでもらってからクエストにのぞんでもらうようにと村長さんから言われてたのですが、そうする

と村に帰るのが2日遅れてしまっんですよ。なのでハンターさんに決めてもらいたいのですが……。遅れてもいいのなら真っ直ぐセレスティアまで向かいます。」

龍

「ん……。わかりました。ドスランポス先に狩ろうと思います！」

「わかりました！では森丘に着いたら再び起こしますね。」

龍

「はい。お願いします。」

と休む暇もなくドスランポスを狩ることになった龍達なのであった。

†第10話 森丘へ……………（後書き）

次はキャラクター紹介を入れたと思います。

更新予定は24日の0時です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299/>

モンスターハンター

～ 龍の住む世界 ～

2011年12月20日14時45分発行